

越後の文人・越川翠溟の篆刻を含む諸芸

岡村 浩

序

會津八一（一八八一～一九五六）を縦軸に見立て、その自用印の刻者中、越佐にかかわる文人を見出し調査を折々継続してきた。これまで

富山天池（一八五九～一九三四）

勝田忘庵（一八七六～一九六二）

乙川大愚（一八九九～一九六二）

三国晴康（一八九八～一九六九）

山田寒山（一八五六～一九一八）

に言及、とくに寒山の来越に関しては、『新潟大学教育学部紀要』に七編にわたり県下を巡遊する動向を分析し、越後各地にも篆刻趣味に通じる人物が存在したことを詳述し得た。そもそも篆刻とは、実用を旨とする印判業（判子屋）の手とは異なり、印面に文字が認識されればよいという訳ではない。字法、章法、刀法の三法に依拠し、古意と雅趣を有する印章を作る。本邦の篆刻は徳川期初めに明国より渡来した独立と心越の禪僧が先駆と見られ、のち榊原篁洲・細井廣澤・池永道雲等が名を著した。さらに今日の芸術につながる、秦漢印への復古を提唱した甲斐の高芙蓉（一七二二～一七八四）の出現があつて、その影響を受けた諸人の旁流が筆者の研究対象とする明治期以降の越後文人にもいるのである。

八一と寒山の二氏は世上に知られた文士ながら、拙稿に綴った調査結果から浮かび上がってきた人々の殆どは、今日地元ですら名前が話題に上る

ことがない。しかし各々の事績をつぶさに辿ってみると、篆刻という小さな技芸に見られがちな斯界が、中央の流行と地方の嗜好を繋ぐ大切な橋渡し役の一翼を担っていた有様が理解出来る。彼らは生前、地域の幅広い文芸のリーダーとして多彩、かつ豊饒な活動を展開しており、一人を取り上げれば背景に諸々の巷間の話題が付着してくるのは、誠に調査のし甲斐があるというものである。

本稿においては、平成四、五年頃に知り得た越川翠溟を紹介しつつ、昭和戦後期までの文士の歩みの一端を解明する。調査の意義に関してだが、とくに他の文芸分野につながる篆刻の妙業に言及することを主眼に設け、本県文芸史の隠れた人材の掘り起こしに努めたい。

越川翠溟の紹介

以前に新潟市佐久間書店で「汲古斎印存」と表紙に墨書された小冊子を手に入れた。毎頁印紙に枠と共に「汲古斎金石」と文字が印刷された和綴じ冊子で、計三十二顆の印影を収めた所謂「印譜」である。冒頭の頁には、「丁亥暢月下澣 汲古斎印存 汲古斎主人自著」と筆記されている。「汲古斎」とは恐らくその刻者の斎号・つまり書斎名なのだろうが、他のことは判らない。が、中には「翠溟」と刻したものが数種捺してあり、「新潟市古町九番町一四六二 越川翠溟」（図1）と刻した住所印も収録され、手懸り

〈越川翠溪刻印・原寸〉

図1 住所印



図2 北越書道會印



図3 同上

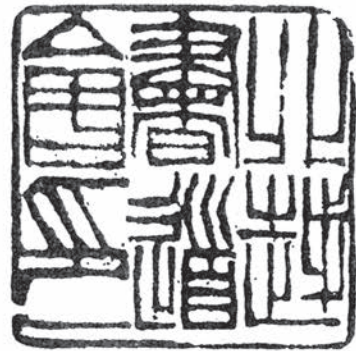


図4 江川蒼竹印



図5 佐山大業印



図6 渡辺鴻業印

側款
「汲古齋主人作」(木印)



側款

「戊子春日鴻業先生
雅正汲古齋主人作」



図7 放情自娛



図8 佐久間書房



図8 作の印箋より

辛卯暮春刻呈
佐久間書店主
汲古齋主人

〈星野尚朴刻印・原寸〉

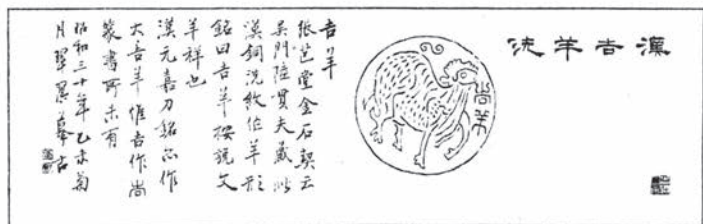
図9 無歷庵主人



図10 無歷庵



図11 翠溪自畫讃



になりそうである。刻者は判らぬものの、かねて越後の篆刻資料を蒐集していたので、当地の印人に関する資料に間違いのないと思ひ保存し眺め続けていた。後、郷土誌『蒲原』八十三号（H4刊）に「越川翠溟と競書誌『墨香』」と題し、小文を寄稿したところ、読者から教示を受けられた。あわせてこの印譜の刻者について語っていただける方にお会いすることが出来、少しく資料が得られたのは僥倖であつた。

刻者は越川氏、名は菊次郎。字は子謙、翠溟と号す。また汲古齋主人、本名にちなみ鞠寿廬、墨香居主人等の別号を持つ。汲古齋とはその部屋の呼び名である。

大正六年（一九一七）四月十一日東京生。近代書道界の大家、日下部鳴鶴の流れを汲む近藤雪竹、藤本竹香、田中真洲の影響を受けた。仮名は相澤春洋と親しかった。田中氏主幹『筆の友』をはじめ多くの競書誌と関連があつた。戦時中に夫人の父の姉宅のあつた水原に疎開し、新潟との縁が始まる。運輸会社に勤務し、戦時中に国策で諸社が合併され日本通運株式会社が興された際、同時に移り、本社より昭和十九年に新潟支社へ赴任した。この時翠溟三十四歳、庶務課長としてである。ついで昭和二十七年、監査部の独立と共にそちらへの配属となり、昭和三十二年、長野支店長代理として転勤を命ぜられ、新潟を離れた。夫人との間には一男一女がある。

『墨香』誌にみる活動

翠溟は昭和二十三年十二月、新潟市において競書誌『墨香』を創刊した。これは、日本通運株式会社新潟支社内（新潟・長野・山形・秋田が管内）の従業員に対して書道趣味の鼓吹を促すことを目的としたもので、最盛期には日通社員内の会員数は二百名を越したという。月刊で新潟市流作場（現、万代町）日通新潟支社内に編集所を設け、運営資金の一部も社からあてがわれた。『墨香』創刊号巻頭には、「：我が日通新潟支社に於ても近藤前支社長、島村支社長はじめ会社幹部の斯道に對する深い御理解に依り、終戦直後書道会を設立、不肖指導の下に毎年展覧会を開催、時には當地デパートに進出するなど着々所期の成果を収めつつあつたのではあるが、こ

の書道会を支社のみ獨占から開放、管内全従業員並其の子弟を對象として更に日通全従業員をも紛合したる書道会たらしめ、ただに斯道の普及發展のみならず之を通じて従業員相互間の親睦、興味に依る結合等を圖る意圖の下に競書を主としたる書道雜誌發刊を計畫、偶偶當地教育書道会の重鎮大野千山氏の入社を機とし急激に之が具体化するに至り直ちにこれを会社幹部に圖りたるところ幸に協賛御援助を賜りここに創刊第一號を發行するの運びとなりたるは不肖無上の喜びである：」と競書誌發刊の経緯につき翠溟自身が一文を寄せている。

この競書誌は一〇四号で終刊となつたが、それらを通観すると、單なる競書誌の域を脱し特筆すべきカラーを備えていることに気付く。会員の半紙、条幅作品、及びそれに対する批評を掲載している点は極くオーソドックスであるが、用いている中国・日本の古典の種類が豊富で、初学者対象というより玄人向けの作りである。参考手本とされた古典の臨書は全て翠溟本人が担当し、自運課題の方は大野千山が當つた。大野氏は新潟市本町通四番町住、白山小学校の教諭を退職、日通に入社、書風は流麗で平易な仮名を得意としたものだった。

『墨香』誌の内容で最も目を引くのは、毎号鑑賞作品として古今の名家の筆跡を巻頭に掲げていることで、例えば日下部鳴鶴・巖谷一六・中林梧竹・貫名崧翁・長三洲・丹羽海鶴・高田竹山・川村驥山・山田正平等の書を、中国では呉昌碩・王一亭・楊守敬といった豪華な顔ぶれがみえる。殆どが翠溟の所蔵品というのだから、嗜好の高尚さが推しはかれよう。特に崧翁や鳴鶴、梧竹を好んだようで数本ずつ所有し、掲載作中には今日では滅多に拝めない名作とおぼしきものが含まれている。

記事についても、碑法帖や書人の紹介文、本格的書道史・書道用語解説・研究論文の連載が行われ、理論面における専門性を重視していることが窺える。地方出版の競書誌、それも社員用の入門書としては質の高いものである。会の顧問には相澤春洋・田中真洲・藤本竹香等中央の書家が名を連ねている。

翠溟の目指したもの

『墨香』出版当時、その審査概評等を担当した小原呑宙（元、翠雨）氏宅を訪れ、お話を伺った。氏は昭和二十二年五月入門。日通社員以外で翠溟の自宅で稽古を受けたのはこの方位である。翠溟は元々南画を好み、画譜形式の作品を多く遺している。小原氏によれば、翠溟の書斎を訪れての第一印象は、絵画の先生かと思った程その方面の本がたくさんあったという。「汲古齋」と名付けられた書斎には、木箱入りの書物や和とじの冊子がぎっしりと積まれ、常に床の間の軸を掛けかえては楽しんでいた。几帳面な性格で、机上の本などはまっすぐに折り目正しく置かれ、家では和服を着て来訪者と相対することが多かった。自ら文人趣味を自認し、それは他人からみてもひと昔前の風格、気品、繊細さを漂わせる書斎での立ち居振舞いであつたという。

制作については、画をやらぬものは墨に七彩ありといわれる本当の墨の色が判らないので駄目だといわれた。篆刻をやり始めたきっかけは、詩・書・画・篆刻の四道を併せて行うことを理想とする中国明清時代の文人主義を实践しようとしたもので、凝り性な性格が表出している。『墨香』（通巻二十三号・S25・10月刊）の「巻頭言」には、「墨香は勿論競書雑誌ではあるが、時折は画や印についての記事を掲載したり、参考品も載せたいと前にも述べたことであるが、仲仲うまい様には行かない。競書雑誌から手本ははずせないし、競書当選者筆蹟は猶更省略するわけにはゆかぬ。寧ろ写真版を増したい位のものだ。記事も豊富で写真版も沢山なら申分ないが、会費二十五円ではとても駄目。結局こんな平凡な競書誌に落ちつかざるを得ない。こんな貴重な写真版の一頁をさいて画だの印だの載せるのは勿体ない話だが、これも私の好みで致方ない。私の好みではあるが、会員諸君に少しでも画や篆刻に興味をもつて頂きたいと云う私の好みの押賣でもある。清の呉讓之、趙之謙、吳昌碩の如き書、画、篆刻の三絶の名家には及びもつかぬものでも書人の嗜として関心位は寄せたいと思う。」と誌上には書と同様、画作や篆刻を薦める記事が散見される。

実際、『墨香』誌に掲載されている翠溟の画蹟作には、明治期頃の文人の記したものの如く古色が看取され、落ち着いた見栄ることのない、風韻を帯びた点に魅かれる。

尚、日通新潟支社時代には、月謝をとって教授するのは精神的に墮落してしまふといつて受けとらなかつた。社員への漆削は昼休みや仕事の合間に気軽に引き受け、朱墨で漆削を行つた。機嫌のよい時に作品を頂戴しても、後で交換してくれと申し込まれ、その場で忽ち破り捨てられたことも間々あつたらしい。展覧会活動の功罪をよく認識し、門下の出品は各自の意志に委ね、当の本人は殆ど不出品であつた。また、鳴鶴・一六・梧竹等を愛玩しながらも、上田桑鳩等新進作家の書風を見るにつけ、明治期の書跡の価値観が今後どうなるか判らないと語っていた。時代感を読みつつ、鋭い知見の一端が垣間みられる言として看過できない。

新潟を去つてから

翠溟の新潟県内での生活は、水原町から新潟市古町通、ついで同市関屋田町の杜宅を転々とするものだったが、昭和三十一年になって長野支社へ支店長代理として転勤を命ぜられた。そして長野に移つてからは、篠ノ井から長野市、伊那、飯田、松本へと以前にも増して業務の都合、転居を繰り返した。再び松本から新潟への転勤の話が持ち上がったが、諸事情で断り返し、停年を待たずして昭和四十六年、五十五歳で日通の系列会社「信濃トラック」の社長の座を辞し、以後松本に腰を据え篆刻を専門に行うようになった。この間、脳けっせんを煩つたが回復し、後遺症がなかったことは幸いであつた。

長野県では二回個展を開いたが、新潟時代には戦後、市内大和デパートにおいて布施醉石（篆刻家）・大野千山（仮名作家）の他、画家一人と共に四人展を開催したのみに止まつた。昭和六十二年（一九八七）十月二十五日、翠溟は肺癌でこの世を去つた。享年七十。

惜しいことに翠溟の蒐集品は没後散佚し、ほんの少しばかりのものが往時交わりのあつた方々の手元に片身の品として伝世している位である。

會津八一との交わり

戦後昭和二十一年、新潟市に居を構えた八一とは、使者がやってきたり手紙の往来が行われた。その一証として、『會津八一全集』（第十巻・中央公論社刊）には、八一筆翠溟宛書簡二通を収めており、日付は昭和二十九年九月三十日と、三十年一月九日になっている。前便には「前略 先日御目にかかりし際、中央公論社にて拙者の圖録を公刊するといふ風評につき、御質問ありしに對して、その時としては未完なる旨御返詞申上おきしところ、最近二三日前に到り、その種類の小圖録の出版を許すことにより、決定し候間、前回の御質問に因みて他事ながら御報致し候。但し『春日野』に比しては遙かに小規模の企劃にて候。頓首 九月卅日夜」とある。常々双方の間で書簡の往来が行われていた節が認められる。『春日野』は昭和二十九年八月一日刊。文中の「小図録」とは不明。この頃、中央公論社依頼の丸ビルでの小個展準備、進行中だった図録編集の停止を揭示する他者宛書簡が散見される。

後便には、「賀正 私の住居の隣の博物館では、従来現代書道を全然無視して居りましたが、私の考として、この春から、貴下のほかに江川、高須、渡辺、中俣の諸君の色紙（曲尺八寸五分）を陳列したいと思ひます。今月中に御作品をいただければ好都合です。陳列の方法などについては私に御一任下されば幸甚です。額縁のことも御考へ下さい。質素簡單で結構です。」と述べられている。

この八一書簡に述べられた企画展は、昭和三十年二月から新潟市南浜通・北方文化博物館新潟分館を会場とし、「越佐名流墨蹟展」と銘打って開催された展覧を指す。当時の新聞記事により、そのあらましを覗いてみると、北方博物館主催の「越佐名流墨蹟展」は目下同館新潟分館（新潟市南浜通り二）で開催している。出品は會津八一博士の収集したもので、越佐の生んだ文人、画家、歌人等および来遊した文人墨客の墨蹟。文人では館柳湾、市島春城、坂口五峰、吉田東伍、大矢透等、画家では五十嵐浚明、富取芳斎、長井雲坪、石川侃斎、越陳人、片山北海、行

田魁庵、山田花作、書家では良寛、巻菱湖その他現代作家まで網羅してある。会期は来る二十八日まで。

とある（『新潟日報』昭和三十年二月二十日付）。「そのほか現代作家まで網羅してある。」の中に、翠溟も含まれていたのである。因に前掲の八一書簡にはこの他現代作家として、江川蒼竹・高須翠雲・渡辺秀英・中俣斗山各氏の名が認められている。

さて、この展覧会に翠溟が如何なる作品を寄せたのだろうか。これに關しては記録が残っていないが、口碑によれば「南山寿」と隷書で記した大さき半切三分の一程の作が一点含まれていたとされる。当時、八一の寓居・北方文化博物館新潟分館と目と鼻の先に、日通南浜寮があった。翠溟は監査部に所属し、出張ぎみの生活が続き、そのため夫人がしばしば南浜の八一宅へと遣いに行かされたのだった。夫人の証言によると、八一宅の玄関先にはよく記者が来ており、それに八一は目も向けず、夫人に向かつて「奥さん、旦那さんを大切にしないさい。印まで刻す人は、日本にそういない、得難い人間なのだよ。」と告げられたという。

この他に見出された両者の接点として、『墨香』（通卷九十一号・S31・8月号）によると、八一が箱書きをした劉石庵（中国清代の書人・山東諸城の人）の書幅を翠溟が所蔵していたことが記載されている。如上のことから推察し、八一の自用印に翠溟刻印が含まれていても不思議ではないが、今のところこの点について論ずる資料がない。

翠溟の印技とその交友

意外にも、『墨香』が刊行されている際中、翠溟は篆刻の技芸を前面に押し出していない。元々絵画を描くことから出発し、落款や讀文を入れるために書を始め、併せて讀文に用いる詩歌や古典の文学の世界を涉猟し、最後には作品が完成した晩に捺す雅印を刻すべく、篆刻趣味に身を浸した経緯を有しているが、四絶の中で最後に到達した印技が最も前面に押し出されるようになったのは、長野に移住して以降、それも会社務めの生活を辞した後のことであった。それまでは刻すものといえは自用印が主で、人

から依頼されることがあっても刻料を求めている。

もう一点、意外に思われたのは、翠溟からの印技の手解きを受けた者が殆んどおられない。その中で長岡在住の星野尚朴氏は、翠溟に影響を受け篆刻に取り組み始めた希有な存在で、篆刻に関する交わりにつきお話を伺えた。

星野氏は本名尚武。尚朴と号す。別号は風谷山樵。昭和七年（一九三二）長岡生。「無歴庵主人」とも称すその書齋には、二世中村蘭台の揮毫した「無歴庵」の扁額が掲げられていた。昭和二十五年、日通入社（長岡支店）、昭和二十六年、初めて翠溟に会って以来、長岡より新潟市・関屋田町の書齋に三十二年まで足繁く通い、書の指導を受けた。長野に翠溟が移った後も数次師を訪れ、晩年の姿に接しておられるが、『星野尚武書作品集』（平成三年開催の第一回個展図録）のあとがきに興味深い記述がみられるので引用したい。

：又、生前最後にお目にかかったのは、今から十五年程前、松本市村井の御自宅であった。偶偶その日は先生満六十才の誕生日、私の訪問は五年振りのことであった。大層な御機嫌で、夕食の後もしばらく談笑、突然「おお、合作やるや」といわれ、先生が尚、私が朴何れも朱文、側款は先生に入れていただいた。タテ九分、巾三分の寿山石である。爾来、常に机辺にある。：

この文に照応するものとして、星野氏宅には今も合作印「尚朴」が残されており、側款には「癸丑六月二十四日 尚朴翠溟合作 于邨井墨香居燈下」と刻入されている。

「癸丑」は昭和四十八年、翠溟五十五歳のことで両者共に酔刀。星野氏からは取材の度毎に翠溟の印技を物語る貴重な資料の披瀝をして頂いているが、はからずも氏から頂戴した「汲古斎印藪」と題する印譜の冒頭には、「丁亥夏五月汲古斎印藪 翠溟自題」と墨書されていた。これはつまり、冒頭に掲げた私が入手していた印譜と同じ年に作成されたものである。丁亥は昭和二十二年、翠溟三十歳のこと。

次にいくつかの印影を掲げよう。図7の「放情自娛」（朱文印）は、その落款の刻調からして極く初期、即ち昭和二十一年、二年頃の作と星野氏

は推定された。図4は江川蒼竹、図5は佐山大業の両氏の自用印。図7は北越書道会印（二種）で、競書雑誌『蘭亭』（中俣斗山主宰）の発行母体である。

珍しいものには、越後南画壇の重鎮・渡辺鴻業の印を刻している。新潟市在住の鴻業遺族宅には今も夥しい数の画伯の自用印が保存され、中には佳刻も相当含まれており、鴻業の力量や見識を如実に反映している。翠溟刻印は三顆が見出され（図6）、各々側款に刻した年月が刻入されているのは見逃せない。三顆は、翠溟が手控えとして残した印譜中にもみられた。別に見出せた印譜を披露する。

①「聴涛印譜 二集」（唐本仕立一冊）

扉に「丙申孟冬 聴涛印譜 翠溟題」と行書で款記を、隸書で題を書き慣れた風で記す。「夢盦鉄筆」と印刷した印箋の他、「対姫山房印譜」「汲古斎金石」の文字を付印した印箋を用いる。中味の多くは自用印だが、巻末に「佐久間書房」（朱文）等、他者分を含む。これは明らかに依頼印であろう。

②「味爽印存」（唐本仕立一冊）

扉に表題を隸書で記し、「丙申暮秋于更科 翠溟菊題」と行書で付す。「味爽印社」の文字を付印した印箋。「新潟市流作場字メ切一七一五一二 翠溟越川菊次郎」（朱文）の住所印を含む。

③「墨香居印存」（唐本仕立一冊）

扉に②と同じ文字を墨書、署名は「翠溟自題」。「汲古斎金石」の文字を印刷するも、枠は二種類がある。坂井・住川・本間・岡田・青野氏等印を初めの方に押印している。

右三点は三冊一括で入手したもので、扉の墨書により昭和三十一年（一九五六）、翠溟三十九歳製、新潟より長野へ転居した年に当る。「対姫山房」とは、布施酔石の書齋名である。この年の刻印を収めるばかりでは

なく、自用蔵印を一挙に押捺して自家用として作ったものであろうか。特に目をひくのは、②③の表紙が石鼓文の原拓を切り貼りした実に凝った仕立てで、大変貴重な拓本を惜しみつつも、愛玩の手段にこのようなやり方を行ったのだらう。かつて編集発刊した『墨香』（通巻八号・S 24・七月刊）巻頭に自蔵の呉昌碩集石鼓字対聯を掲載、その解説に西川寧執筆「呉俊卿の臨書」一文を付載する位、この古典に関しては従来造詣を持ち、かつ重愛の的であったに違いない。

新しい資料に基いて

巻頭に触れたように筆者の翠溟論はまず初めに『蒲原』八十三号に寄せ、次に増訂分を「越川翠溟と競書誌『墨香』について」と題し『東アジア』（H 7・新潟大学東アジア学会）四号に寄せた。この際多くの資料をお示しくださった星野尚朴氏から、追加でまとまった新しい関係品を教えられた。例えば『東アジア』寄稿文の文末に紹介した、飯田市で開催された翠溟個展の案内状である。

○「越川菊寿廬書画小品展」の御案内

初夏の候益々御清安慶賀の至に存じます。さて日本通運飯田支店長越川君は夙に書画を学んで三十年、会社勤務の余暇営々として研鑽を続けて居ります。素より同君の志は、「聊自娛」の境地より発したるところにて、あく迄も余技を称するも、技は既に専家の域にあり、その書は戦前早く東都に於ける書家に於て高位に入賞或は無監査の遇を受け、戦後二十二年自ら墨香会を主宰、書道雑誌「墨香」を発刊、中正書道の提唱につとめ、現に中央における有力書道団体、東方書道院、雅遊会、書道奨励会等の同人、審査員の他各地書道会の役員として名をつらねております。昭和三十一年長野市に転任、翌年病を得た本務漸く多忙となるに及び墨香発刊を断念、目下県下書壇とは没交渉乍ら書家名鑑等にては県内有力作家として挙げられて居り、同君の実力の程が窺えます。所謂書家の正気を厭う同君は書家と呼ばれるを好まず、専らアマチュアをもつて任じて居りますが、この精神がその画にも顕れ、職業画家に見られぬ、清新なる風格を一部同好の士

から喜ばれております。同君の篆刻も亦秦漢を宗とし清代の新鮮さを加えて定評があります。今回我々有志相り同君の飯田在住を機にその作品を展示、広く江湖に御推薦申し上げたく左記により書画小品展を開催致しますので御誘合せ御来観の上御高評頂きたく茲に御案内申し上げます。

○越川菊寿廬書画小品展

日時・昭和三十八年六月七～九日

場所・飯田市知久町一丁目 伏見屋ホール

○越川菊寿廬略歴

越川菊次郎、翠溟と号す、字は子謙、別に菊寿廬、墨香居、汲古齋主人の号あり。大正六年四月東京に生る。昭和十六年日通に奉職す。少時より書画を好み、書を故菅谷幽峯に師事、また田中真洲等の門に出入、画は故杉溪六橋、小室翠雲に益を亨く、二十代書に専念、碑版、古法帖を友として研鑽に努む、二十二年書道団体墨香会を主宰、雑誌「墨香」を発刊、中正書道を提唱す。三十二年（筆者註・三十一年の誤りか）長野市に転じ転任後病のため墨香廃刊、三十五年飯田に転じ今日に至る。現在東方書道院、雅遊会、書道奨励協会同人、審査員。

○書画小品展の開催に当たつて

この度従前からの知己であり、通運業界に於ける大先輩である牧島さんはじめ皆様方の御すめで、私の拙い書画を展示させて頂くことになりました。書画を学んで三十年とは申し乍ら、素より人に誇示せんが為のものではなく、自ら独り楽しむいわば生涯の伴侶たるべき趣味として選んだ此の道です。で、芸術探求の成果を世に問う等という所謂正面切ったものでもなく、単なるアマチュアの遊戯、手すさびを臆面もなく人前に晒すことにひかかるものを感じましたが、近時の前衛書道とか墨象芸術なるものに些か抵抗も感じております際とて、折角の御すすめでもあり敢て展観させて頂くことにしました。書だけでは少々寂しく全く御添えものの画ですが、併せて御高覧、御叱正を賜れば幸甚です。古来幾多の碩学や芸術家を生み育んだ、風光明媚なるこの飯田の地で久方振りの個展を開けますことを深く喜びとして居ります。

癸卯五月 翠溟 越川菊寿廬
○出品目録 全五十五点(内容省略)

『東アジア』寄稿文をまとめて二十年以上を経た。この間、星野氏から御提供を頂いた資料に基き、増訂文を綴る。

星野氏御提供資料

平成二十八年十一月、星野家を訪れ拝見した資料より注目したいものを記し留める。

前項の飯田市伏見屋ホールにおける翠溟個展時の記念写真を貼ったアルバム一冊。中に三十六葉の写真がみえる。まず伏見屋入口に立看板を掲げ、右脇に星野氏夫人と思われる方が立たれる一枚。次に会場での翠溟の姿を収めたもの。小原氏から聞き及んでいた和服と異なり、ネクタイをしめスーツ姿の洋装の紳士像の背景に、扁額を頭上に掲げ、一点は「嘉寿」隷書二字、もう一点は振幅の激しい行草多字数書。下方に「長楽無極」篆書四字、これは行草の動きに通じる運筆の速度感を尖鋭な収筆に形状化した独特なもの。

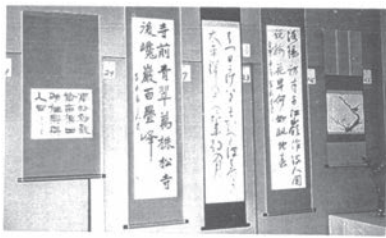


図12 個展会場 (S38)

隣りに墨竹自画讃と「いなつまの」仮名二行作が、一カットに映っている。これを見るだけで軸、額、書は篆隸書と行草、加えて仮名、また素材が多岐に及ぶ画讃作といった幅広い展示作の性格が看出て来た。

次に会場風景を写すが、接客用の机の周辺、大勢の参観者の熱心な鑑賞の様子が窺える数枚が続き、盛況ぶりが伝わってくる。軸は半切二行の行草が主で、中に珍しく六朝風楷書が見える。画讃は茶掛にへちま、水仙、蓮、扇面に鮎図、条幅では李白像を描出したものが掛かる。

同じアルバム中、昭和四十七年(一九七二)十月二十八日に撮影したものには衡立両面への揮毫作があり、一面に七言二句を隸書で、もう一面に淡彩李白像自画讃を行書で書く。

もう一作、寒山拾得図自画讃(軸装)、これにも淡彩が施される。中央の人物画を囲むように行草で寒山詩の讃を付記、落款には「壬子六月上浣翠溟写并題于深志客中(下脱與字)」と書き、紙面に計四印を押す。アルバム最終頁には松本の翠溟宅とおぼしき二カット、入口に「書画墨画墨香会書画教室」の肉筆看板を掲げている。こちらに通っていた人々が個展会場写真に写っておられるのである。こうして転居後も文字通り墨香会の看板は掛け続けられた。

この一冊のアルバムの御蔭で制作道三十年の節目、脂の乗った頃の作風全体を偲ぶことが叶った。アルバム扉頁には星野氏のボールペン書きによる一文が貼られている。「越川翠溟 名菊次郎、字子謙、汲古齋主人、鞠寿廬、墨香居主人の別号。大正六年(一九一七)四月十一日生 於東京。昭和六十二年(一九八七)十月二十五日歿 於松本、七十歳。」

改めて『墨香』記事を拾遺して

今日『墨香』全一〇四号を揃いで保管している機関を知らない。ここには戦後、中央に連動する地方の動向、全国的な書文化の波及の有様が垣間見える。

創刊号(S23・12月刊)から通巻十二号(S24・12月刊)まで表紙は明墨・方于魯製の拓本を用い、翠溟の隸書二字の題字(図12)。日通新潟支店長・島村氏の「発刊を祝して」の巻頭文に続き、近代名家作品欄を設け貫名崧翁行書多字数作と日下部鳴鶴花卉自画讃、次頁に翠溟の行書二行目作、左隣りに総務・大野千山の鳴鶴調の行書二行作。次頁は半紙参考手本として翠溟と千山の四作、次頁は臨書参考として崧翁臨館本十七帖と館本十七帖の二点を併載、この比較を促す構成も玄人向けである。そして翠溟による「創刊の辞」、「初学者のために」、「近代名家紹介」(崧翁・鳴鶴)、大野千山のこの年七月入社という一文から始まる「所感」、先の館本十七帖の

「古典解説」、応募規定、入会案内と続く。後記には一刻も早く配布したいと心急ぎたるため、意に充たない点が多くなってしまった、と反省の弁を短文に綴る。

以上の本の構成はずっと後まで不変。徐々に翠溟の自画讃作が多く登場するが、南画の趣味から初め入ったという通り、本人のやりたいことの方向性が顕著になっていく。また中央の幅広い作家の半切、半紙作を参考手本として連続掲載しているのも注目したい。この頃は現在よりも流派の異なる作家同士の横の繋がりが頻繁に行われ、全国的に競書誌の発刊が各地に繰り上げられる中、各地での発刊の紹介が冊子の末尾にしばしば読めるのも特色の一つである。

通巻二号（S24・1月刊）に本会役員として顧問に相澤春洋・長谷川耕

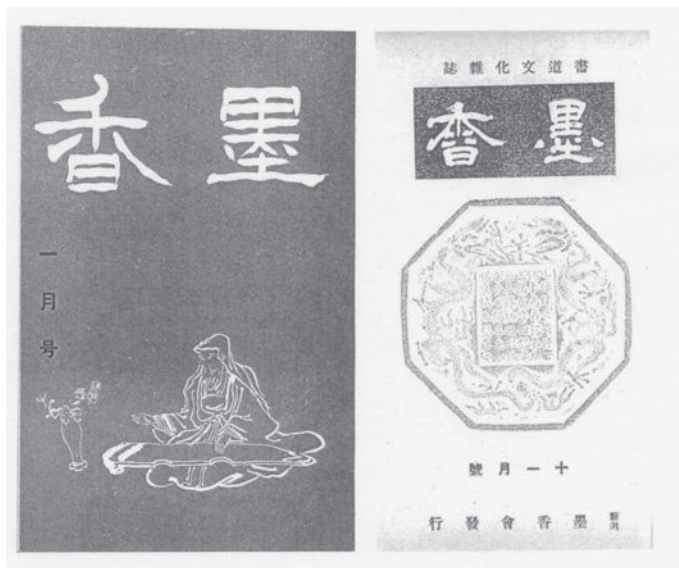


図13 『墨香』表紙二種

南計五名、参与に五名、協賛員に岡本芳山・高須翠雲・江川蒼竹・布施酔石の四名、総務に翠溟自身と大野千山、幹事に坂井翠園・野崎翠松・畠山翠簾の三名。

通巻三号（S24・2月刊）になると顧問に藤本竹香・津田翠岱、協賛員に十島霊石、幹事に小原翠雨の諸氏が書人関係者で加わっている。

参考近代名家作にやはり興味注がれる。鳴鶴が最も多く、次いで梧竹と松翁。他、前田黙鳳・永阪石埭・丹羽海鶴・比田井天来、現代作家では川村驥山・西川寧、とくに多いのが地元新潟の江川蒼竹作。江川氏とは互いに東京時代からの旧知の仲で、ほぼ毎号にわたり氏の行書作を掲載。吉田苞竹調の蒼竹作は、少なからず翠溟に影響を及ぼしている。

近現代作家で特筆すべきは中国文人作が混在している点で、呉昌碩・王一亭・查士標・胡公寿作である。三点何れも対聯（双幅）で、この特殊に思える形式に関する魅力と愛蔵ぶりを通巻八号に寄稿している。呉昌碩は余りに令名高き人物ながら、他の二氏は趣味の篤い人々の間で珍重されるに止まっていた時代であった。

通巻十四号（S25・1月刊）は表紙の題字とデザインを一新した上で、創立一周年記念誌上展号と銘打っている。審査概評に応募作の少ないこと、優秀作を選ぶのが難しく写真版に出す作の選出に労苦のあったことを「正直の処」と断って綴っている。半紙一位に小原翠雨。短評から無暗に賛辞を呈さない翠溟の人物、指導方針が読み取れる。この頃翠雨は競書出品作の概評を任されている。また柏崎生で当時川崎在住だった協賛員・布施酔石の「篆刻応需」欄を設けている。不思議にも会員篆刻作の本誌への応募欄はなく、翠溟自刻はおろか、他者の刻印紹介が当然あつてよろしきと思われるも見当らない。

中央の人々との交渉についてだが、来越の記事が読めたり一寸調べ難い人物の経歴の紹介記事も役立つ。変わった内容では、通巻十五号（S25・2月刊）に「松翁の名蹟（白玉井銘）姿を消す！」——「貫名の傑作（白玉井銘）は巖谷一六より阪正臣に同氏より久志元梅莊氏に傳わり今日に至つたが一月十一日東京藝術大学で久志本常基氏より尾上博士のお世話で石橋犀水の手に渡り自宅へ運ぶ途中上野駅で何者かの手にはうばい去られ目下八

方散策中！絹地に細字入念の作。折帖桐箱入り 価格三万円 発見者には御禮をす。」が読める。当時の一大記事であったし、荃翁に私淑し所蔵を重ねたことから関心事であったのだろう。

さらに『墨香』によって、翠溟字書の動向を拾遺してみたい。

○通卷四十一号（S 27・5月刊）所収―布施醉石刻印二顆印影。これは翠溟自用印のだが、印箋に「夢盦鉄筆」と印刷してある。これによって旧稿に翠溟刻印譜として用いた『聴涛印譜』は、酔石刻印を集印したものであることが判明した。翠溟の自用印と紹介した箇所を訂正する。

○通卷四十二号（S 27・7月号）―師範・小原翠雨君肖像筆蹟略歴。これによって片腕として健腕を揮い庶務に当った小原氏が軍役から戻り、昭和二十三年五月より翠溟に師事した旨が読める。草書三行は師風に比べ、より潤渾の妙が強調された一作。

○通卷五十四号（S 28・7月号）所収―西川寧先生書行草七言二句作。住川蕃陽氏所蔵。筆者は住川氏から本作を譲り受け愛蔵している。氏から新潟個展出品作の一点と聞き及んでいる。個展は昭和二十四年五月十四・十五日に古町萬松堂二階において會津八一他、岡田正平新潟県知事、市長等要人が発起人となり開かれた。このことは通卷七号（S 24・5月刊）の本部便りに比較的詳しく読める。それによると五月十二日、日本書道美術院審査員・青山杉雨を連れ西川氏到着。十四日の夕方、高須翠雲、吉岡金峰氏と共に翠溟は西川氏宿舍を訪問、「先生を囲み歓談。十五日、午後よりイタリヤ軒で西川氏を迎えての座談会、「終了後展覽会場へ西川先生、會津博士を中心に記念撮影」に翠溟も参加した。以前筆者は、新潟での西川個展について論文を発表し、就中萬松堂会場での中央に西川、右に八一が座る集合写真を使用していた。八人中、高須翠雲・佐山大業・青山杉雨の書人の姿は分かったが、大人の内あと二人がどなたなのか知らず仕舞であったが、この記事によると当時の年齢からして後列右側の人物が翠溟であることが判明した。同席自体、新潟文苑での翠溟の位置付けを察する重要視点となろう（図14）。

○通卷五十五号（S 28・8月刊）所収―翠溟臨顏魯公爭坐位稿。動きをおさえ潤い豊かな単体の妙味に目が行く。落款の行書に翠溟らしい才気を添

えている。

○通卷五十九号（S 28・12月刊）所収―翠溟臨魏張玄墓誌。端正な形、沈着した楷書で翠溟のイメージを払拭する珍しいもの。先と合わせ意外性を抱く臨書対象として紹介する。

○通卷六十五号（S 29・6月刊）所収―「二つの書道全集について」翠溟寄稿文。平凡社と河出書房から同時期に全集が発刊され始めたことにつき、一種の不愉快をもらしている。双方の監修者を兼ねる人物に「乏しき信念と無神経さ、迎合性に嫌悪感を覚える」とは、個人を賭けた節操ある仕事を斯界の錚々たる權威に望むもので、読者学者への配慮を滲ませる。

○通卷六十九号（S 29・10月刊）所収―墨香會長岡支部第一回同人展会場風景。この年九月十一・十二日長岡市内商工会議所ホールにおいて開催した一コマ。壁面に暗幕をかけ軸装作が陳列してある（図15）。

○通卷七十二号（S 30・1月刊）所収―長野県原村・真道中庸による刻印応需欄。この号に限らず度々掲載。中庸は会の理事、半切参考手本をしばしば寄せている。

○通卷七十三号（S 30・2月刊）所収―相澤春洋画讃「葛塚市日図」。春洋は本会顧問、度々作品を寄せる。戦中の疎開、戦後の来遊で本県にはゆかりの作が点在している。葛塚は新発田市で、今も市が立つ。その様子を俳画風の樂趣溢れる構図に描く。人物の群像の巧みさを出雲崎での客中作



図14 西川寧個展会場にて（於 萬松堂）

にも遇目している。

○通卷七十八号（S30・7月刊）所収―「箱書に就いて」の翠溟文。箱書の例を中国に求めることは難しいと綴りつつ、本邦の用例の様々な形態、揮毫例を図示の上説明している。この種の文は斯界では珍しい。

○通卷八十三号（S30・12月刊）所収―墨場参考に翠溟自画讃作を掲載。「漢吉羊洗」四字を

平たい字形の八分隸で記し、中央に漢の銅洗紋に見る羊形を中国金石著録（金石契）から拾い、恐らくは淡彩を用い描出。さらに左方に行書で、この銅洗紋のいわれを八行記す。「昭和三十年乙未菊月翠溟摹古」と款記にある。半切を横向きに用い、「摹古」の意図通り、尚古の趣味を漂わせるもので、南画家では目の行き届かない書人好みの素材である（図11）。

○通卷八十七号（S31・4月刊）所収―巻頭言「印を視る眼」翠溟一文。本当に愛蔵に価する愛印中の愛印は、初世中村蘭台と山田正平の二印であると書道新聞社のアンケートに答えたことから、初学者にも印の好悪を見分ける眼識を養うことを薦める。

○通卷八十八号（S31・5月刊）所収―「愛印記」翠溟一文。前文にあった二印をさらに解説。蘭台刻は「丙午一月香草生篆 于舟江」と箱裏に記した、明治三十九年（一九〇六）来遊時の作。蔵印の大半は畏友・布施醉石のものが「私の眼識が彼の進境に追いつけない故か」と断った上で、比較的旧作の方が使用しやすいと告白している。実際雙石・正平等個性的な印技を氣にしつつ刻したものが醉石の印影に現れている。古風に映るオーソドックスな旧作の方が自分の作に合致しやすいという訳で、翠溟の好む書風が裏面から透けてみえてくる。他、蔵印が百を超えること、閑職

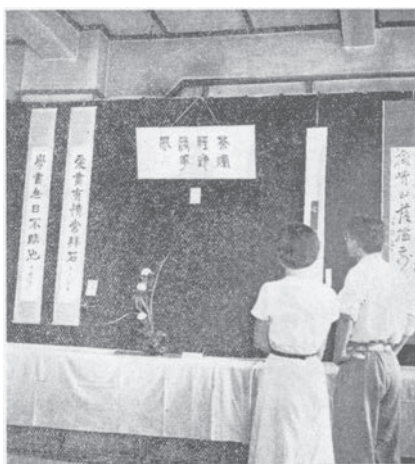


図15 墨香会 長岡支部展（S29）

を得たあかつきには、整理して印譜を作っておきたいと考えている。

○通卷九十一号（S31・8月刊）所収―臨書参考に清・劉石庵楷書を汲古齋収蔵品として掲載。後記に帖学派第一人者真蹟を紹介と書き始め、原帖は全紙に濃墨でしつとりと落着いた細字でよく石庵の面目を発揮、僅か三葉の小冊ながら表題は清人の筆による題簽。函は高田竹山の題、さらに八一の筆で「劉塘統勲子 字崇如 号石庵 乾隆進士由編修累官休」と長文の紹介文があることを綴っている。

これ位に止めるが、他に全体を通して本会幹事・高橋翠溪文による「支那書道史」を毎号一頁分連載しているのも注目したい。当時としては入手の難しい参考書に基き手堅い知見をもって、読み手の関心を喚起する工夫が感じられる佳文で、基本から逸話的な内容まで教えられることが多々ある。本県書人では今まで他にこの人物の名をみることもないので、隠士の一人かもしれない。

度々触れるが汲古齋収蔵として紹介する日中著名家の作品群は、やはり素晴らしい。一体如何に入手していたのが全く語られていないが、○通卷二十八号（S26・3月刊）所収の翠溟一文『汲古齋の記』に、満屋の器玩状況が活写している。生家の東京麻布の二階八畳を「汲古齋」と名付けて以来、荒川、麹町、ついに越路なる水原の閑居、また新潟花街古町、そして関屋へと社宅を転々。新潟暮らしは仮のもの、やがて生涯を終えるべき正真の書齋で「吹雪荒れ狂う北国の新潟関屋なる仮の汲古齋を偲ぶべき思い出の記として」、六畳と四畳半の二間に置き掛けている文房具と先人今人書画作を詳述している。素封家・地主の売立目録をみれば、戦前邦人の営みに骨とう品と称されるものが我々の想像をはるかに超え巷間に流布していたことが知られる。松翁と鳴鶴が最も多く、これは作者が多作であったことにもよるが、中に越後路作とおぼしきものが散見されることから、当地で継続的に収蔵を豊かにしていたものと推察する。

あわせて吉田苞竹・長谷川耕南・相澤春洋等の寄稿文、この三氏も含め、片や江口翠揚・松田江畔・光本三千萬・真道中庸・泉田石城等中央地方間わず交流のあった人々が寄せた半切手本作にも目を見張る。大規模公募展

で競い合う出品作の猛々しさとは別趣の、床の間に掛けて閑居の書齋で書を味わい合っていた世相に憧れを抱かせるもの。これらの方々には一派を率いた人より幹部を担った人物が多く、大抵書名が表舞台化から遠のいてる例が多い。書名は残らずとも、かように通覧を遂げると、大切にしたい作品群に遭遇することが叶った。以上の意味合いからも『墨香』誌上注目の寄稿文と参考手本例、日中名家作を選出してみれば、現代へ向かう書流を証言する一冊の資料にまとめる価値が充分あるものと信じる。

通巻九十九号（S 32・4月刊）、この頃でも手本の担当者は余り変わっていない。ただし近代名家作紹介欄がなく、翠溟作の登載に止まる。もう十年を経てさすが先人作の蔵品も大方用い、また察するに江戸明治の書画の鑑賞自体が競書誌の読者層に与える影響の加減に変化をきたしていたのかもしれない。もう一つ、大野千山に代わり星野尚樸の名前が出てくる。巻頭言に「無歴主人」のペンネームで寄稿するのは星野氏で、二世中村蘭台書額入手に因んで名付けた書齋を愛する思いを綴る。ここを無二の修練道場とし、諸々の文房具に磨きをかけ、法帖類の埃を払って開き学ぶという佳文である。また競書審査概評「学生の部」を氏は担当し、二十四人分の批評が読める。学生部の半紙手本揮毫と、昇段の途にも目ざましき作を許多見せる。九年半をかけて通巻百号（S 32・5月刊）を迎えた際、「第百号に寄せて」の一文も尚樸が著し、自身と会との関わりに言及している。「…然し僕が今日書を愛し画を好むようになったのは第一に『墨香』の御蔭だと思っている。越川先生に最初に御目にかゝったのが昭和二十六年の春爾来二年位の空白期間を除き、機会ある毎に有意義なお話を伺い御指導を頂いて今日に及んでいる。残念乍ら生来愚鈍のため、その歩みは牛歩にも似ており、又中央の書展等にも未だ出品したことも無い。所謂『井戸の中の蛙』である。さて今回第百号の昇試で師範に当選できたことは誠に嬉しい限りである。僕の書生活はこれから本腰を入れなければならないと思う。大いに張切り、墨香の発展のために微力乍らお力添えをしたいと思います。」この号には「春季段級昇格試験成績発表」が行われており、甲部師範に尚樸が、また知己では三國智也氏の乙部二段への昇格が読める。

通巻一〇三号（S 32・9月刊）の巻頭言を再び尚樸は担当、今春新潟県

書道協会が誕生し、今日の県展（当時文化祭展）にこの秋から書道部門が新設されること、中央にあつてはこの年正月「東方書道院」が発足し第一回展が開かれたこと、そこに翠溟他、墨香会関係者で十島靈石・津田翠岱・長谷川耕南・江口翠揚が同人として、小原翠雨と尚樸が院友として参加。各地で組織的に斯界が動き始めている現状に触れつつ、入賞を意識する余り自己を見失い技巧を凝らす傾向を避け、「展覧会は大いに奨励するけれども、それを最終目的とするには賛成出来ない」、そして伝統に立脚した上に自己の芸術を作るべく、「展覧会の英雄となるより、むしろ書齋の鬼と化す方をとりたい」と明記している趣旨に、よく傾聴したい。

そして通巻一〇四号（S 32・10月刊）、ついに終刊を迎える。「墨香会解散について」の御挨拶文を巻頭に翠溟は書く。理由として元来会員数僅少のため内容充実も図り難く、相当困難な経営であつたこと。自身が昨秋に長野転勤を命ぜられ十年間過ごした新潟を離れるにいたつたこと。及び重ねてこの年大患にかかり健康状態に不安が残ること、以上の理由から解散にいたつたと一頁でまとめる。翠溟は当時、四十歳。休刊に近い形で、将来再刊の含みも周辺の人々の後記には読める。ひとまず代わりに一六・鳴鶴時代に創立した書道奨励協会（田中真洲会長、藤本竹香・菅谷幽峯副会長・翠溟は幹事）への入会を勧めている。

以上一部の摘録に止まるが、昭和二十三年十二月設立以来十年の歳月を経た墨香会は、通巻一〇四号の機関誌『墨香』を発行して新潟での活動の幕を閉じた。この頃編集は創刊当初から役員に参画していた坂井翠園の手によって日通新潟総括主管支店內（市内流作場）で行われ、つまり紆余曲折あるものの最初から終盤まで一貫して勤務先の庇護の下、運営活動がなされたのである。

翠溟から星野尚樸（朴）へ

『墨香』が終刊に近付く頃、紙面で精力的な活動がみられた御方についてである。星野氏が翠溟の書風を最も受け継ぎ、かつ翠溟の印技を語る上で不可欠の存在であることは間違いない。

そもそも氏と筆者・岡村との出会いだが、偶然入手した印譜から翠溟に興味を覚え、やや記憶があいまいになっているが、入手先の佐久間書店主・栄治郎氏から翠溟を知る方・住川蕃陽氏をご紹介頂いたかと思う。住川氏にお会いして次に小原吞宙・坂井翠園氏を教えられ、三氏からの取材結果によって度々いうが『蒲原』八十三号（H4刊）に「越川翠溟と競書誌『墨香』」を寄稿出来た。三氏は新潟市内在住だったが、もう御一人星野氏の御名前を窺っていたものの、長岡在住ということで訪問は後日のことになり、まずは『蒲原』誌の小文を御送りしたところ、親切なる教示を長文書簡によって頂戴。それから何度か長岡の御宅に伺い諸々の御話をきき、資料を拝見、よって改めて『東アジア』四号（H7刊）への寄稿に結び付いた次第である。

改めて氏の経歴を略記する。昭和七年（一九三二）新潟県長岡市生まれ。昭和二十五年日本通運（長岡支店）入社。昭和二十九年、墨香会長岡支部展開催、出品。三十二年東方書道院展（再開第一回展）出品。六十三年日通を退社。平成三年、第一回個展を長岡市丸専デパートにおいて開催、書作二十五点を出品。平成七年、第二回個展を長岡市厚生会館小ホールにおいて開催、書作品三十八点と篆刻作一二三顆の印影を出品。平成二十八年七月二十四日没、享年八十四。

二回の個展に際し図録を刊行されており、大方の経歴はそちらを参考した。本名は尚武、先の『墨香』誌上のペンネーム（雅号）は尚樸を用いていたが、のち尚朴と改められたのだろう。第二回個展前から風谷山樵の別号を用いる。子供の頃から山歩き、畠仕事を好み、また山間谷間の山菜採りの後、自ら調理を楽しんだ。あく抜きせずしては口に入れられなく、また抜け過ぎてもせっかくの持ち味を損ねてしまう。書歴三十年を振り返って我が身の「あくは少々抜け過ぎてはいまいか、気掛かりなところである」と後記を締めくくっておられるのは、いかにも氏の言動態度が分かりやすく読み取れる。世相を風刺しつつ、自己のやり方を貫徹した。

初めて御伺いしたのは、長岡駅近くの銀行あるいは郵便局で、ミニ個展を開催すると御連絡を受けお邪魔した時だった。素材とされる詩・句・歌・言辞に個の文芸と対峙する姿勢が感じられた。言葉の響きの重たい方で、

初めは当方も言葉を選び言を交わした。ご自宅では師・翠溟譲りの書物資料の提示を受け、途中から盃を交わしながらのひと時となる。舌頭で言葉を舐め丸くしてから口に出される内容は、前稿『墨香』誌の巻頭言に「無歴庵主人」の号で寄稿していた内容通り、大衆化の中で正規の伝統性を失う書文化の現状を憂う色合いの濃いものだった。

高校時代からの書への取組と作品発表の成果を、第二回個展図録の「あとがき」に具体的に綴っておられる。昭和二十年代、桑原翠邦・上田桑鳩・金子鷗亭等東京から簡単に呼べない大家を招へいして長陵書道会講習会が開かれた時にも参加。高校時代から二十七、八歳位までには短期も入れると十種ほどの競書誌に出品していたと記す熱の入れようだった。昭和二十九年から三十五年までつづけた『筆の友』における田中真洲・荻谷幽峰・藤本竹香・桑原江南との接触は、氏にとって大切なものとなる。昭和書史に残る書人では他に、十島靈石・松井如流の名がみえる。共通して多くが師・翠溟とつながる方々で、殊に藤本竹香との直接の交わりは印象深いものになったようである。好みの古典では徐三庚・趙之謙・張猛龍碑・顏真卿行書が挙げられている。思えば師・翠溟の収筆の尖鋭化は徐三庚と重なって見え、また翠溟の字は趙之謙から取ったものと聞くので、趙の書に尚朴（以下尚朴と記す）が魅かれるのは当然であろう。

翠溟篆刻へ言及するために

これより尚朴に言及する意義は、その師・翠溟の篆刻に言及することに目的がある。重ねて述べるが、『墨香』誌では翠溟自身の篆刻作に関しての記述が皆無に等しい。書の振興を期しての競書誌発刊に、許多の自画讃作・南画を挿図に用いている点からも、少しは篆刻に関わる記述やコーナーが設けられてよいはずなのにそれがない。

若干、列挙してみる。中では珍しい頁、「汲古印譜」と名付けた翠溟刻印影六顆を紹介する一葉を見出した（通巻二十三号・S25・10月刊）。「清風萬卷書」「聊自適」「高踏全其志」等の印文である。全て線の太細の変化を付けず、湾曲する点画に基づくもの。「印談義」欄（通巻三十号・S26・

5月刊)では、印全体の必要知識を詳述している。

「書道人の常識(二)」と題す翠溟の一文にも、篆刻の用具に関する知見が読めた(通巻六号・S24・6月刊)。町の印判屋と篆刻での違いに触れる内容で「篆刻では印判のやるように起底刀で底をきれいに浚ってないし、鉄筆をもって石に書するといった刻し方として認印の様に深くもない。然し印肉が凹む程印を押付けたりしないで、肉池の中に中高になった良質の印肉を軽く叩く様に、印面にむらなくつける様に正しい用い方をして居たなら、つまって困る」ことはない、と綴る。当時これ程注意して材質や物理面に気を配る趣味家は余りいなかったであろう。続いて「大分印のことにのみ長々と書き過ぎたようだがこれは私が余技として鉄筆を弄する為、特に印に対して鋭敏な為だと思って御容赦願いたい。然し、吾が墨香は南画や篆刻に迄手をのばしてしたい方針なので、印のことについても折りにふれ書いてゆく心算でいる。」と、やはり斯道的重要性を鼓吹する力の入った言辭が読める。

他方「小品用雅印特別奉仕」欄(通巻二十七号・S26・2月刊)、ここでは翠溟自身ではなく、広島県に本部を置く聖筆書道会の重本藝城の刻印を幹旋している。恐らくは、元来南画の道を愛好する思いから付随の書さらに篆刻に業を拡張していった節を自弁するのを読むと、三つ目の篆刻はあくまでも自娛の世界と位置付け、指導的立場を取ることを控えたものと推察する。先に御芳名を挙げた小原・住川・坂井三氏といった極近い方々ですら、印技にまでは手を染めていない。ただ一人、尚朴が専ら行い、普及に努めた。次にここからは翠溟の篆刻に言及すべく

①他者刻の翠溟自用印

②翠溟の自刻

③尚朴の印技と証言

の三点を絡ませて論を進めたい。

翠溟と尚朴自用印に窺う

翠溟の自用印が伝わる。縦横五センチメートルの正方形印箱に組み合わせ

せて丁度はめ込まれた(白文)、八顆一組で、各印文は「汲古齋」(白文)、「无式」(白文)、「越川菊印」(白文)、「菊印」(白文)、「子謙」(朱文)二顆、「翠溟」(朱文)「翠」(溟)「白文・下駄印」。線に角張ったところが見られず、布置、結体の分間布白は均一的で目立った変化を設けない刻風になる。これには側款がなく刻者未詳ながら推究の手がかりとして、本印と二緒に取り扱われてきたもう一式の組印八顆があり、こちらも越川氏自用印であることが印文から分かる。後作には印箋に「昭和二十三年歳戌子 醉石刻」と墨書があつて、布施醉石の手になることが明らかである。前作の刻風と同趣で、察するに無落款ながら全て醉石刻と推定する。

この人物については「墨香」にも随時読者に醉石刻印を周旋する欄が設けられているので、翠溟と親交を持つ印人であることは違いない。「墨香」(通巻四号・S24・2月刊)に略歴を紹介しているのでここに引用する。

○協賛員布施醉石先生

名は和夫、字は子高、醉石と号す。越後柏崎の産、黒姫山を望むに因り居を對姫山房と称す。家は代々刀圭の業に従事し翰墨の趣味あり、明治大学在学中より故足立嚙郎先生に師事し、彫蟲の技を収め研鑽大いに努む。泰東、東方両展に屢々出品毎回入賞す。丸の内篆刻会等に講師をつとめ斯道の発展、普及に寄与せらる。現在川崎市に住し、日本書道美術院に属す。本会越川総務とは夙に親交あり。

本県出身の印人では巻頭に名を記した勝田忘庵・乙川大愚等は書壇と関わりを持たない人々だったが、この醉石は一代あとの活躍時期で各方面で間々刻印を見出しやすい。だが実績を改めて注視しようとする、現代作家に比べ資料が不足しており、やはり置き去りにされた感がある。

日本書道美術院とは元々昭和二十年十二月創立。二十二年、泰東書道院の流れを受け継ぐ。尚々、星野尚朴の自用印を探るとそこにも醉石刻印が含まれ、「尚印」(白文)「幽篁」(朱文)の下駄印、側款は「醉石乍」。「星野尚武」(白文)、側款は「尚朴仁兄正 壬辰八月乍 醉石蘇」。「長岡市城内町」住所印(朱文)、側款は「甲午玄月 尚樸仁兄雅正而乍 醉石蘇」。「号尚朴」(朱文)側款は「醉石乍」。計四顆を数える。側款より「壬辰」は昭

和二十七年（一九五二）、「甲午」は昭和二十九年（一九五四）、何れも使用者尚朴の二十歳代、相当早い頃に師・翠溟を通し墨縁で結ばれていたのだった。

上述から翠溟と近い印人に布施醉石がいて、刻印の依頼と周辺への斡旋が行われたことが判明した。

例えば尚朴の蔵書中、師の旧蔵図書の割愛を受けた中に「子謙」（朱文）印を押すのは、先掲醉石組印中にあつたもの。また尚朴蔵書法帖の多くに「星野尚武」（白文）を押しており、これも先掲醉石刻にあつたもの。

残された資料から

肝心の翠溟刻だが、原物印材に遭遇しない。こうなると先出の筆者が入手した印譜数冊位しか印影を確認出来ないことになる。「汲古斎印存」「汲古斎印藪」は昭和二十二年、翠溟三十歳、「聴涛印譜」「味爽印譜」は昭和三十一年、三十九歳。この間は丁度新潟在住時期に当たり、『墨香』の主幹を務め精力を注いでいた頃であつた。手際の良い成譜の状況から何編も作成したかと思われ、一定量を刻し上げている。尚三冊の内、『墨香居印存』（二十六顆）が翠溟自刻、あとの二冊は布施醉石刻を主とする、翠溟自用印（蔵印）を整理して捺したもののである。この点、旧稿「近世以降の書流文芸史」（『新潟県文人研究』15号・H24刊）等の記述を訂正したい。

ところでそもそも雅号の由来だが、字の子謙は趙之謙によりどこがあるかと星野氏の教示を得ているが、「翠溟」の号が何に基くものか聞きもらし、関連記述を管見では知らない。印人で「翠」が付くのは高畑翠石（一八七九～一九五七）。戦前の泰東書道院・東方書道会の審査員を歴任した点で翠溟の事績と重なる点がある。文人趣味的な所業も残し、奇をてらわない、温潤な刻風は同系に近い。もう一人、個展時の自らまとめた経歴で、南画の益を受けた人物に小室翠雲の名を挙げている点も見逃せない。本人の第一の抱負だった画業の師系に「翠」字が付くのである。翠雲は本邦最後の南画家で、全国に門人を出し、多くに「翠」字の付く雅号がみられる。何れにせよ雅号から翠溟の印技の本源を辿ろうと試みても決め手がなく、可

能性として付記するに止まる。

翠溟と尚朴の合刻

筆者宛尚朴来信（便箋ペン書・H5・11/4消印）に次のように記される箇所がある。「尚朴」（朱文）は翠溟先生退職された年、松本の御自宅に御邪魔した折のもの。夕食後（二人とも可成出来上がった状態）篆刻談議に花が咲き、小生メモ紙にカゴ字で何かを説明しはじめたところ、突然『オイ合作をやろう』とのこと。先生の素案では朴は確か（図示）な感じでキチツと。小生「いささか整い過ぎては？」と。先生「ウンそうだな、お前さんのそれ面白いじゃないか」と気持ちよく了承され、おまけに刻っているうち適当に欠けたりして更に一味加わったような次第」と湯気の立ち昇る応酬に、両氏の気質と子弟間の篆刻感が滲み出ている。この文は第二回個展の併載記事にも大筋が紹介され、本論でも重要なやりとりとして前出したが、改めて読み直すと印影までは出ていなかったもので、この星野氏書簡より転載して示す（図16）。書簡によると、「朴」字の木へんの上部の構えを師の構想からひとひねり加えた。「尚」

字は翠溟刻だが、これまでみた昭和戦後期刻風と異なる。以前は翠石調にも近いなで肩の湾曲を主旋律としたものだったが、この「尚」字は転接の当たりが強く、直線主体の印技を呈している。現代篆刻界の表現

も、大印化につれて勁健で曲直のメリハリの効いた作風が専ら顕著である。時代の嗜好の変貌と軌を一にして、斯界の表現も変遷を遂げている。

尚朴の証言とその印技

尚朴の第一回個展は還暦の節目に開かれたもので、仕事に精勤してしばらく両立し難かった書制作を再開。実物大原稿を入念に用意して取りかかれた。「悩ましい日々の中で、救いがあった。それは篆刻に手を染めて



図16 師弟合刻（原寸）

いたことである。」と綴る作品集「あとがき」を引用する。

あのバリバリ、バリバリという音が、心地よく耳に響いてくる。鉄筆を伝わってくる感触は、毛筆のそれとはまた異なった趣がある。更に娯（たの）しいことは、書作の題材（詩句）に見合った引首印や遊印の語句選び、加えて、書作の雰囲気と併せ印の章法を思案する等々、興味が尽きない。

書作に厭えては鉄筆に持ち替え、面白い印ができれば又毛筆を、といった具合で、いつの間にもやら、大小さまざま、その数は、百顆をはるかに越えていた。

こんなことを書いているうちに、四十年前はじめて師の書齋を訪れた時の様子が浮かんできた。新潟市関屋田町の二階であった。私の挨拶を背にうけて「ハンコ彫るのも書道のうち」と、私はしばらくの間、正座して師の後姿に對していた。

又、生前最後にお目にかかったのは、今から十五年程前、松本市村井の御自宅であった。偶々その日は先生満六十才の誕生日、私の訪問は五年振りのことであった。……

それから十年程して、先生は他界されてしまった。

何一つ恩返しもしなかった不甲斐なさを悔やんでいる。それにしても、俺は、よき師にめぐり会えたんだなあ、とつくづくおもう。この気持は年を逐うごとに深まっていく。

そして自刻を押すことを奨励する會津八一の言を紹介した後で、出品作は全て「自作印を用いてみた」と記す。

さらにもう一文、第二回個展「あとがき」より引用する。

ところで私の師匠は当初、南画を志しておられたのですが、画讀の必要性から書を学び更には篆刻へと芸域を広げられました。画・書にはそれぞれ師匠は居られたようですが、実態はほとんど独学だったと思います。私が二十歳そこそこの頃「俺の真似ばかりするんじゃない」と叱られ戸惑ったことを思い出します。「いいか古典をしつかり学ぶんだ、そうすれば自

然と自分の書が生まれてくるんだぞ」と諭されました。技術的なこと等にはほとんどふれず原拓本をはじめ貴重な資料類を見せてもらったり時として法帳や本等も貸してもらいました。「篆刻鍼度」は現在のように入門書等無かった時代です。から夢中でノートに書き写しました。毎晩夜中まで月（金）の五日間、土曜は帰宅と同時にボタンキュー、夕食・朝食・中食を喰はず日曜の夕方まで棒寝入り両親を心配させたものでした。昭和二十九年夏のことです。この写本は今も時々出しては読み返しております。

以上のことを整理してみる。星野氏は自刻を用いることを理想と掲げ、退職後、日頃寧日なく刻印に向かい、結果たくさん印影を残している。丁寧な箱に入れた自刻自用印の原物も少なからず拝見出来た。これから取り掛かる準備が周到になされた印材や推敲を重ねた印稿、改刻の跡を残す印材等伝わるものは多く、日常が篆刻と一体化していた程斯道を愛し、かつ正統な作法や理解の普及に尽力しようとした作文も併せて残る。刻風は大よそ一定で、①直線的②不要なデフォルメを施さない③長脚体を殆ど際立たせない④取筆に独特の鋭い引き抜きが目立つ。⑤転接部は直角に曲げ折っている。――曲線を主とする穏やかな刻風の師と趣を異にするのは、引用文にあった通り真似をこばむ師・翠溟の教えを実践した証左であろう。尚朴の書と篆刻は師・翠溟の所業を、平成時代の嗜好で磨きをかけたものである。師と同様、尚朴は二十歳代の書との取り組みの後、ブツリと書壇との交誼を殆ど絶った。やがて自分の世界観で習い込んだ。その行草体の律動美は、線が生命の軌跡である格好の例で、退職後の個展からの制作再開の姿には、枯淡な老境に移行する気配は一向にない。あえていえば、即興的な仕上がりや書にも篆刻にも生まれると、さらに作風に幅が出たかとみる。と同時に氏と対面して人物を知れば、一本に磨き上げるのが借り物でない尚朴の姿勢であることが十分認識出来る。

結び

序文で隠れた人材の掘り起こしに本稿執筆の企図があると述べた通り、

例を挙げると文中名前が登場した翠溟と同時代の人々、江川蒼竹・佐山大業・中俣斗山・高須翠雲・弦巻松蔭諸氏は揃って経歴を掌握できるが、一人翠溟はそれが今まで見当たらなかった。生前は會津八一に選ばれ昭和三十年に催された「越佐名流墨蹟展」への出品依頼を受けた程、戦後本県書文化の中樞に認められた節もあり、かつ中央の書壇再結成期に際し、昭和期を彩る書人との接点を持っていたはずなのに、今日全く書名が煙滅している。

したがってそれをさぐるには特殊な術を辿り関係者への取材を重ねることと、『墨香』誌を繙く他に方法はない。幸いにも初めて印譜を入手して、直ちに門人の方々複数名に取材出来たことよって、中でも星野尚朴氏との邂逅により、少しずつ翠溟の点在する足跡を文字通りかき集めることが出来た。中庸を失わず、端正はさらに端正さを増し、整齊美を帯びた滋味さに魅かれている。

結果、今回は旧稿に加え、星野氏の篆刻業の紹介と分析することを通して、翠溟の印技への言及の補記を試みた。関係者の中で印技を引き継いだのは星野氏一人である。氏の歩みを照射する中で、

○私の師匠は当初、南画を志し、画讀の必要性から書を学び更に篆刻へと芸域を広げられた。画・書には師匠は居たようだが、実態はほとんど独学と思われる。

この辺りが翠溟の所業における篆刻の位置付けを明確に尚朴が語ったものと絞り込みたい。余技ゆえに他者に指導することなく、書ですら技法の強制をしなかったのだから、篆刻にいたっても大切なポイントは『墨香』誌文に載る、高格品緻の技芸たる所以を感じ取らせることに指導の主眼があったのだろう。関係のあった布施酔石は書画の遺作を聞かないのに比べ、翠溟には詩書画篆刻の内、三道がある。この点の併存こそ翠溟の真骨頂であり、専門篆刻家と区分して、三絶を目指し自娛の境地に遊んだ文人の範疇に位置付けたい思っている。交わりのあった先人中、『墨香』顧問だった相澤春洋が通巻七号（S24・5月刊）に「古典へのあゆみ」と題す寄稿

をしている。就中、「越川君は何（ど）ちらかと言えは現代の者に珍しい古い趣味を持つている。大概の人の忘れている篆刻もやる。これは印判屋さんと同一の仕事ではなく鉄筆という立派な書道の一部である。又南画を良く描く。洋画の様に誰れにも直ぐ判るような写実とは別なゆき方のもので東洋独自の芸術である。…深い専門的の鑑識力を持っている。それで居て日通という日本文化の心臓部である運輸の業に当っている。古臭い趣味の人と思う人もあろうが本当の文化人のゆき方を如実に現わしている人なので私は畏友の一人として尊敬している。」と言及するのは、流石に滋味の溢逸した評である。

相澤春洋自身、戦後日展をはじめ中央の大規模展覧会の中樞に入り書の大衆化の一翼を担う旗印になるが、言うまでもなく単純ではない制作の背景を有していた。日本の伝統文化全般にわたり高踏的趣味と見識を持ち、文房四宝等関係しない話題はなからう。近世の画人に私淑し、一代以上古い感覚を漂わせる画作を越後路にも残している。この所業があつてこそ、先の翠溟評が綴られる。「古臭い趣味」と大方が捉えがちな作風を、正統に評価している。

一方、確かに翠溟の所業には、平俗的曖昧さと隣り合わせの味を兼ねる部分もある。密度に欠ける習作の気配が感じられるのは、ある種時代の限界にもよる。ここで若干篆刻界の流れの大筋を確認しておきたい。

明治期日本の印章界の礎を築いた中井敬所（一八三一―一九〇九）の後、古体派あるいは徴派の印人が続き、それが河井荃廬（一八七一―一九四五）の出現によって浙派へと刀法的主流が一変する。荃廬門下の逸材の一人・足達嚙邸に翠溟の畏友・布施酔石は益を受けたと経歴にあったから、大局的に割ってみると郡司樸所・飯田秀處・新井琢斎・山本碩堂・石井雙石・服部畊石・関野香雲等と同系の印人に組する。残念ながらやもすると、今ここに挙げた人々ですら日本篆刻史上での位置付けが薄らぎ、存在が一部の研究家間をのぞけば忘れ去られつつある。したがって中央を離れ地方に潜んだ文士にあつては、等閑視の憂き目をみるばかりになる。

他方、作家の側からみれば自と地域に根を張り、各地の文芸を支える存

在となった。

事実、翠溟の印技には習い込んだ修練の工程は感じられず、あくまで自娛の趣味で鉄筆（印刀）を愛用した姿が浮かび上る位である。ただし管見の限りは、三十歳から四十を越した壮年期の資料からの言及で、星野氏によれば長野での退職後は、益々篆刻に精励すると告げられたとの話があることも付言する。

何れにせよ焦点になるのは、翠溟が篆刻を生かした舞台が南画の世界であったことで、専門領域を拡張すれば自ずと各々の技芸の味も薄らぐ。印技も書も絵画も、そう簡単に高水準まで昇華しかねるし、実際新潟県下の書に関わる文士において、三つを併習しようとした人を見出すことは出来ない。

頭初私は翠溟を書人扱いするよりも、かろうじて残った戦後期までの文士の歩みを解明する役割を果たす人材であろうことに注目し、最大の魅力は前掲の本県書家と比べ、一時代前の風味を持っていることだと旧稿にしたためたが、その思いは一層強いものになった。拙稿の結びに代わる記述だが、詩書画に関心を持ち、さらに延長に篆刻がある。この四つ目に手を染める程の人物は、つまり総合的文士の型にあてはまる。翠溟とはこの型に当てはまる珍しき足跡を残した、別の角度からみれば本県書文化史上、これを試みた最初で最後の人物であろう。その上に、趣味と鑑賞眼の養成のために豊富な日中人文書画作を収蔵したことも、県人では同型の文人像を見出せない逸事である。

翠溟の作品を取り上げる意義

中央で書道展覧会が大小無数に行われる今、県内でも書展は活発に行われ、平成・令和の現代書道界はいよいよ華やかなりし時代を迎えつつある。翠溟が『墨香』を刊行していた頃と作品を比肩すると、内容は多彩でまとめ方も巧緻である。が、見ていてどこことなく心が落ち着かず意が満たされない。「どんな人が書いたのか」「如何なる学書の過程があったて生まれてきた作か」等を知りたくなくなるような作品は少ない。外見上は眼を惹きつけて

も、作品の裏側に潜む「作者の個性」や「書巻の気」といわれる読書など知的作業に伴う品格が、希薄に思えてならない。

著名な作家は多いが、各作家の歩みを振り返り調べてみたくなるような人物はどれ程いるだろうか。如上に考えてみると、越川翠溟について紹介文を記し、本県篆刻文化史中のひとコマに名を伝え留めたいと思うのである。翠溟が新潟県に在住したのは、昭和十九年から足かけ十二年間余りに過ぎないが、先に図に掲出した如く当地の書画家との注目すべき交わりの軌跡を印面に残しているのは確かなことで、戦後の混乱から復興期にかけての新潟の文苑における位置付けが今後正確に、丁寧に行われるべきであることを願う。

最後になるが本稿を執筆するに際し、小原吞宙・住川蕃陽・坂井翠園・星野尚朴の四氏より貴重な御教示や多くの資料提供をいただいた。ここに記して心より謝意を表したい。

図17 翠溟作 齊白石風



図18 尚朴作
「硯田無惡歲
酒国有長春」



図19 同右
「樂道而忘賤
安徳而忘貧」



図20 尚朴刻
「無名之朴」



図21 翠溟作 茄子自画讀

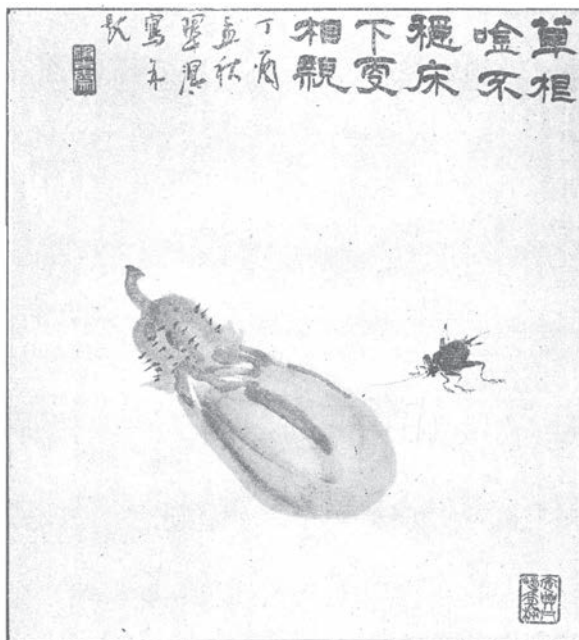


図22 同右 達磨自画讀（翠溟作は「墨香」誌より）

